

ドイツ語初学者の発音習得に関する一考察

— アンケート調査を基に —

吉満 たか子

広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに—ドイツ語教育における発音教育

Dieling (1992) は、外国語授業における発音教育について次のように述べている。

Bevor der Lernende in das Meer der Lexik eintaucht, sollte er Sicherheit gewinnen im Umgang mit den Wörtern, mit ihrer Hülle vertraut sein, vertraut mit den fremdsprachigen Lauten, Lautverbindungen, Intonationsmustern und den vielfach neuen Schriftzeichen sowie den Korrelationen zwischen Lautung und Schrift. (….) Man muß davon ausgehen, daß Vokabeln, die orthoepisch und orthographisch ungenau bzw. fehlerhaft angeeignet sind, de facto nicht angeeignet sind. Deshalb empfehlen Didaktiker, bei der Lexikeinführung der Aussprache und der Schreibung der neuen Wörter viel Aufmerksamkeit zu schenken. Die neuen Vokabeln sollen wiederholt gehört, nachgesprochen, gelesen und ausgeschrieben werden.

(“Phonetik im Fremdsprachenunterricht Deutsch“)

学習者が語彙の海に潜る前には、確実に単語と付き合えるようにしておくといでしょう。単語を覆っているもの、つまり外国語の発音について熟知する、音の結びつき、イントネーションのひな型、そして学習者にとってはまったく新しい文字や発音と文字の相関関係を熟知するのです。(中略) 発音と綴りをあいまいに、あるいは間違って習得した語彙は、実際には習得していないということになります。それゆえ教授法研究者は、語彙を導入する際に、新出語彙の発音と綴りにしっかりと注意を向けることを勧めるのです。新出語彙は繰り返し聞き、発音し、読み、書くことが必要なのです。

Dieling は単語を「意味を運ぶもの (Bedeutungsträger)」としてとらえており、単語の発音や綴りが意味の外側を覆っているとしている。そして、単語の習得は「意味・発音・綴り」が正確に習得されることだと考えている。それゆえ新出の単語は繰り返し聞き、発音し、読み、書くことによって初めて正確に習得されるとしている。

岩崎 (2017) は日本人の初級ドイツ語学習者がどの程度基本的な動詞を習得しているかを調査し、習得の度合いと教科書や授業の重点、語彙の指導などの相関関係を考察した。その結果、授業の重点が「きれいに発音する」ことに置かれていることは、語彙習得にプラスの効果があることを確認している。

中川・服部 (2022) は、ドイツで教える非母語話者ドイツ語教師3名に発音学習と発音教育についての認識や発音教育の目的をインタビューし、分析を行った。インタビューの中で被験者のひとり「発音は偏見と関係がある」と言い、別の被験者は発音学習の目的を「不自然な発音のせいで目立つことがないようにすること」と語っている。さらに別の被験者は「発音が話者の第一印象になる」と述べている。いずれの被験者も発音の重要性を強く認識しているが、他方で被

験者の周囲にいる母語話者教師が発音の重要性を認識していないと感じているという¹⁾。発音の良し悪しがコミュニケーションそのものを左右するだけでなく、社会的統合に大きな影響を与えるほど重要な役割を果たすことを非母語話者である被験者は実感しているが、母語話者教師は発音の重要性を実感していないということである。

外国語授業における発音教育は語彙習得の一部として不可欠である。そして語彙習得の度合いは、当該言語の習得そのものを左右すると言える。しかし、日本の大学における初修外国語としてのドイツ語のように、ごく限られた時間内で学習する場合、発音教育は二の次になってしまっているのが現状である。正木（2013）は教科書と学習者の意識を調査し、学習者の発音への関心の度合いは高いが、日本で出版された総合的もしくは会話重視のドイツ語教科書における音声項目の取り扱いは平均で2.6パーセントしかなかったことを確認している。これは今に始まったことではない。Dieling（1992）は「外国語授業における音声教育は継子扱いされている」と述べ、「多くの初学者向け教科書は、音声の初歩を導入することをあきらめ、いわゆる包括的なアプローチ（Globaleinstieg）をするようになった」と指摘している。

筆者は発音に関して厳しい教師だという自覚はあるが、担当する授業ではドイツ語の発音や綴りの規則を最初に網羅的に導入することはせず、学生が発音に困った際に必要な規則を導入し、練習するようにしている。そもそも一度にすべての規則を説明し、例となる単語をいくつか提示して発音を練習したとしても、発音はマスターできない。加えて発音の習得は個人差が大きく、発音と綴りの規則をすぐに覚えて応用できる学生もいれば、常に同じ間違いを繰り返す学生もいる。ドイツ語学習・習得がうまくいく学生は語彙の発音にさほど問題がなく、学習がうまくいかない学生は語彙の発音や綴りが正確でないことを、筆者は経験的には感じていたが、これまでそれを検証することはなかった。そこで、学生がドイツ語の発音について、「どのような項目を難しいと感じているのか」、「発音練習はどのように行っているのか」、「どのような授業活動を役立つ、あるいは楽しいと感じているのか」、「ある程度学習が進んだ段階で、どのような項目をマスターし、マスターしていないのか」ということを知るためにアンケート調査を実施した。本稿ではその結果を報告すると共に、授業実践における発音教育について考察する。

2. 発音に関する学生の意識

筆者の担当するドイツ語授業では、毎回の授業で理解したことや理解できなかったこと、質問などを学習プラットフォーム²⁾に投稿することを課題の一部としている。教師はすべての投稿に目を通し、質問や誤った理解をしていると思われる投稿には返信する。そして期限を設けて、学生が閲覧できるようにしている。担当するクラスのうち、週2コマを履修する「ベーシッククラス」の学生は、そのほとんどが1～2文程度の書き込みしか行わず、質問を投稿することもそれほど多くない。しかし、週4コマを履修する「インテンシブクラス」の学生は毎回3～5文程度を投稿するし、様々な質問も書き込まれる。そこで、2022年度の第1ターム（4月8日～6月8日）および第2ターム（6月9日～8月4日）にインテンシブクラスの学生20名が行った488件（第1ターム240件／第2ターム248件）の投稿をすべて集め、計量テキスト分析ソフト KH Coder を使って分析を行った。図1および図2は、投稿に登場した単語の共起ネットワークである。これらからは、第1ターム・第2タームに共通して「発音」に関する記述が多いことが分かった。また、表1が示すように第1ターム・第2タームの両方で、最も登場頻度が高かったキーワードは「発音」であった。

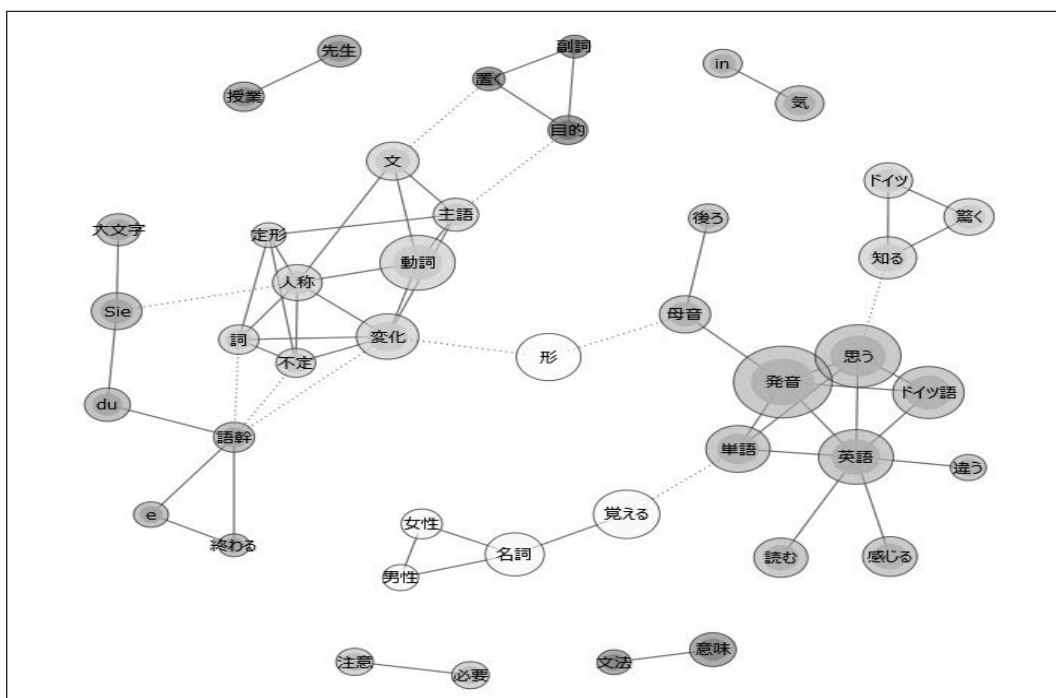


図1：第1ターム投稿の共起ネットワーク

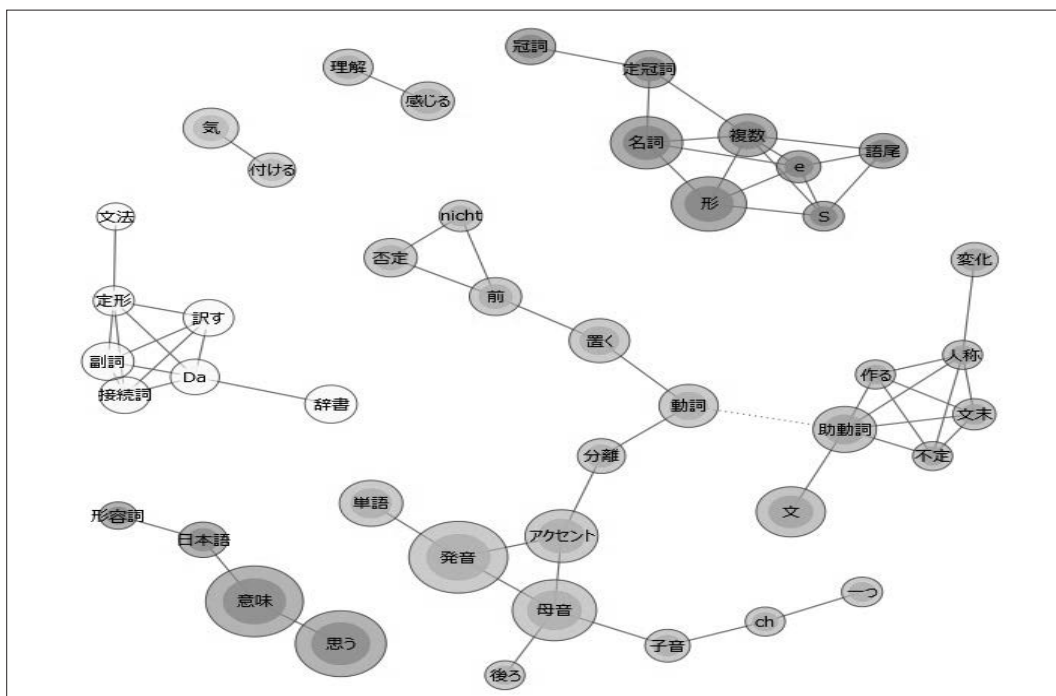


図2：第2ターム投稿の共起ネットワーク

表 1：掲示板での抽出語順位（カッコ内は登場頻度）

順位	第1ターム	第2ターム
1	発音 (167)	発音 (113)
2	思う (126)	意味 (110)
3	動詞 (96)	思う (95)
4	英語 (86)	母音 (81)
5	ドイツ語 (86)	形 (64)
6	覚える (74)	アクセント (60)
7	形 (70)	名詞 (59)
8	わかる (70)	文 (54)
9	単語 (69)	使う (47)
10	変化 (65)	助動詞 (45)

第1タームでは「発音」に次いで「動詞」,「英語」,「ドイツ語」の登場回数が多く、第2タームでは「母音」,「アクセント」,「名詞」,「文」,「助動詞」などの登場回数が増えている。これらはそれぞれのタームでの学習項目を反映しており、第1タームでは、動詞の現在人称変化を学び、第2タームでは名詞の性や助動詞を学んでいる。授業では「発音」が最大のボリュームを占めている訳ではないにもかかわらず、掲示板に最も多く登場していることは、学生の注意や関心がそれだけ発音に向けられていること、そして発音習得に苦心していることが反映されている。

学生の発音習得についてより具体的に知るために、第3ターム開始時にアンケート調査を行った。次項ではこのアンケート調査について報告する。

3. ドイツ語の発音に関するアンケート調査

3.1 対象と方法

アンケートの対象は筆者が担当するベーシック・ドイツ語の2クラスで、一方はインテンシブクラス（週4コマを受講）であり、他方はベーシッククラス（週2コマを受講）である。調査はMicrosoft の Forms を利用して2022年11月に行い、インテンシブクラス20名、ベーシッククラス26名の合計46名から回答が得られた。

3.2 設問

アンケートは記名式で、以下の点について回答を求めた。

- 1) ドイツ語の発音について学習を始めた当初に感じたこと
- 2) 前期と比較して現時点で「ある程度できるようになった」と感じている点
- 3) 発音について普段行っている練習方法（勉強方法）
- 4) 発音の習得に役立っていると思う授業活動
- 5) 楽しいと思う授業活動
- 6) 自分自身のドイツ語の発音について現時点での評価

1) ～5) はいずれも選択肢を与え、複数回答可とした。また、選択肢の1つである「その他」を選択した場合には、具体的に記述してもらった。6) は学生自身の発音に関する自己評価を問うものであるが、これは4つの選択肢から1つを選び回答してもらった。以下ではそれぞれの設問の回答を提示し考察する。

3.3 学習開始当初に感じた発音が難しい点

上述したように、掲示板の投稿では発音に関する記述の割合が高く、学生がドイツ語の発音習得に苦心していたことがうかがえる。そこで、学生たちが学習当初ドイツ語の発音についてどのように感じ、どんな項目に困難さを感じていたのかを調査した。選択肢は「文字を見ても発音するのが難しい」、「英語と違うので違和感がある」「母音（a, e, i, o, u）の発音が難しい」、「ウムラウト（ä, ö, ü）の発音が難しい」、「二重母音（ei, ie, eu, äu など）の発音が難しい」、「s が清音になる場合と濁音になる場合があるので難しい」、「W / w の発音が英語と違うので戸惑った」、「J / j の発音が英語と違うので戸惑った」、「V / v の発音が英語と違うので戸惑った」、「ch の発音が難しい」、「R / r の発音が難しい」、「語尾の -e が発音されるので戸惑った」、「h が発音されない場合があるので戸惑った（h の母音化）」、「b, d, g が場所によって発音が変わるので難しい（語末音の無声化）」、「er の発音が場所によって変わるので難しい」、「母音の長短を判断するのが難しい」、「単語のどこにアクセントを置くかが難しい」、「複合語など長い単語の発音が難しい」、「文のイントネーションがわからない」とした。

「文字を見ても発音するのが難しい」と「英語と違うので違和感がある」を除く選択肢は、教科書の巻末に「注意すべき発音」として記述がある項目で、かつ前期の授業で学生の間違いが目立つ項目を選んだ。

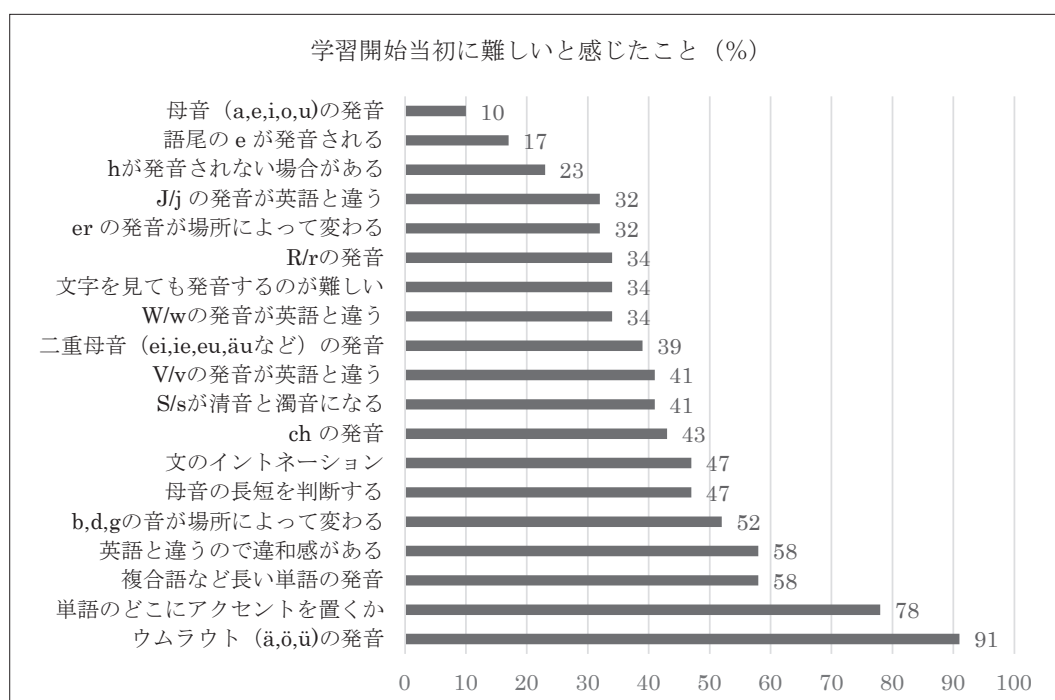


図3：学習当初に感じた難しさ

図3が示すように、アンケートの結果からは、学生が「ウムラウトの発音（91%）」や「どこにアクセントを置くのか（78%）」を特に難しいと感じていることが分かった。授業で間違いを指摘することの多い「二重母音の発音（39%）」は予想に反して少なかった。「母音（a, e, i, o, u）の

発音（10%）」を難しいと感じた割合は最も低かったが、実際の授業では、U／uを英語のように[ju:]と発音する学生や、I／iを[i:]ではなく[ai]と発音する学生も散見される。

R／rの発音を学習開始当初に難しいと感じた学生が34%しかいなかったことは少し意外であった。ドイツ語のR／rは口蓋垂を震わせる「のどびこのR／r」と「巻き舌のR／r」がある。R／rの発音はすぐに習得する学生とそうでない学生に二分され、習得が難しい学生は日本語の「ら・り・る・れ・ろ」の発音で代用している。本来のR／rは日本語の「ら・り・る・れ・ろ」に置き換えられる音ではないが、筆者の授業ではこれを神経質に矯正することはしていない。そのことも相まって、学生にはR／rの発音がそれほど意識されていなかったと考えられる。

3.4 第3タームで「ある程度できるようになった」と感じている点

第3タームの時点で「ある程度できるようになった」と感じている点を、選択肢を与えて回答してもらった（図4）。学習開始当初と現時点での感じ方を比較するために、選択肢は「学習開始当初に難しいと感じた点」と同一の項目とした。

アンケートの結果から、73パーセントの学生が文字を見ておおむね発音できるようになったと感じていることがわかる。また、第1ターム・第2タームの学習を経験し、英語の発音と異なることへの違和感もなくなり（58%）、W／w（63%）やV／v（60%）、J／j（50%）などの発音にもかなり慣れたことがうかがえる。W／wの発音は、疑問詞 was, wo, woher, wie など学習の早い段階で学習する語彙に登場し、その後も繰り返し使われる。J／jの発音も、ja や Japan などに現れる。V／vは教科書で職業名を学ぶ際に Verkäufer／Verkäuferin が登場しているし、多く

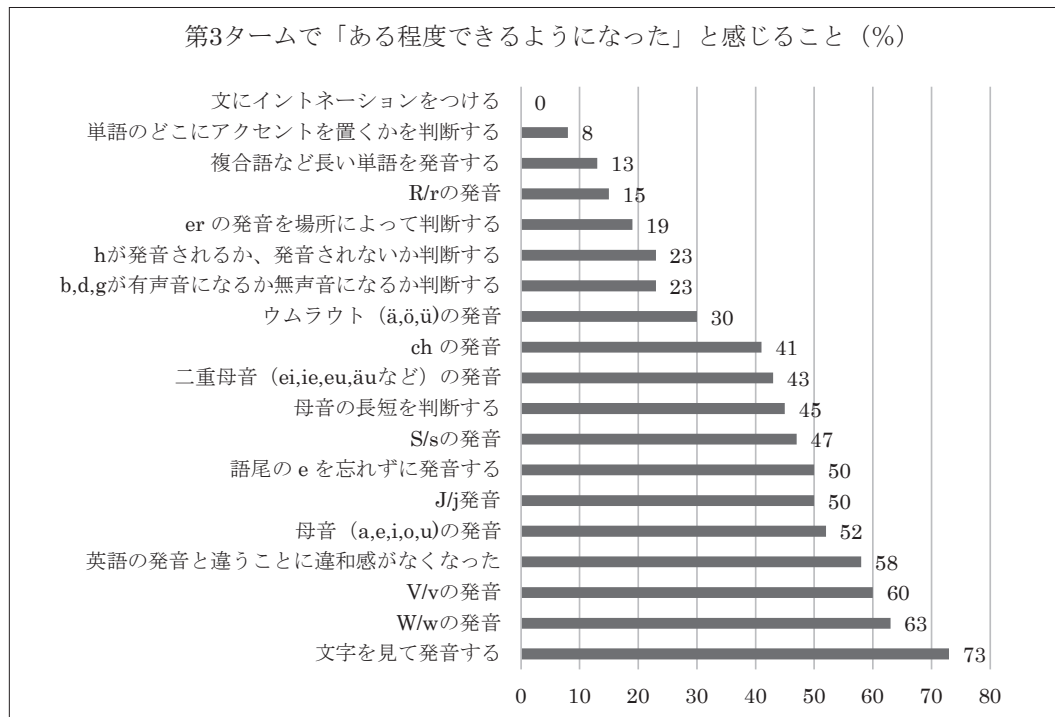


図4：第3タームで「ある程度できるようになった」と感じている点

の学生がフォルクスワーゲン（Volkswagen）を知っている。そのため W / w, V / v, J / j の発音は比較的定着しやすいと考えられる。

「語尾の -e を忘れずに発音する」ことは、50パーセントの学生がある程度できると回答している。これは動詞の人称変化を学び、主語が1人称単数 ich の場合には語尾が -e となることが定着したことが発音に反映されたと考えられる。

他方、場所によって音が変わる子音の S / s (47%) や ch (41%), 二重母音 (43%) の発音や母音の長短を判断すること (45%) を「ある程度できる」と感じている学生は半数に満たず、ウムラウト (30%) や b / d / g の発音 (23%), 発音する h とそうでない h の区別 (23%) や場所によって発音の異なる er (19%), R / r の発音 (15%) などは、多くの学生にとって学習が進んでも難しいままであることがわかる。

短い単語は発音できても、複合語（合成語）のように長い単語の発音ができる学生は少なく (13%), 単語のどこにアクセントを置いて発音すればよいかをある程度判断できる学生は全体の8パーセントしかない。文のイントネーションにいたっては「ある程度できるようになった」という学生はひとりもいなかった。

3.5 学生が行っている発音の練習方法（勉強方法）

「発音を普段どのように練習（勉強）しているか」という点について、選択肢を与え、複数回答可として回答をしてもらった。選択肢は「音声教材を聴く」、「音声教材の後に続けて発音練習をする」、「音声教材に合わせてオーバーラッピングをする」、「教科書の会話や練習問題を音読する」、「教科書にある発音の規則に関する記述を読む」、「自分のノートを参照する」、「クラスメートと一緒に会話を練習する」、「特に何もしていない」、「その他」とした。また、「その他」を選択した場合には、具体的にどのようなことをしているのかを記述してもらった。選択肢として挙げた方法は、授業でも行っている活動である。図5はその結果を表したものである。

最も多かった回答は「教科書の会話や練習問題を音読する（58%）」であった。次いで「教科書の発音規則に関する記述を読む（52%）」と「自分のノートを参照する（52%）」が続いている。50パーセントの学生は教科書附属の「音声教材を聴く」と回答しているが、その音声教材を利用して「後に続けて発音する（36%）」や「オーバーラッピングをする（32%）」といった練習をし

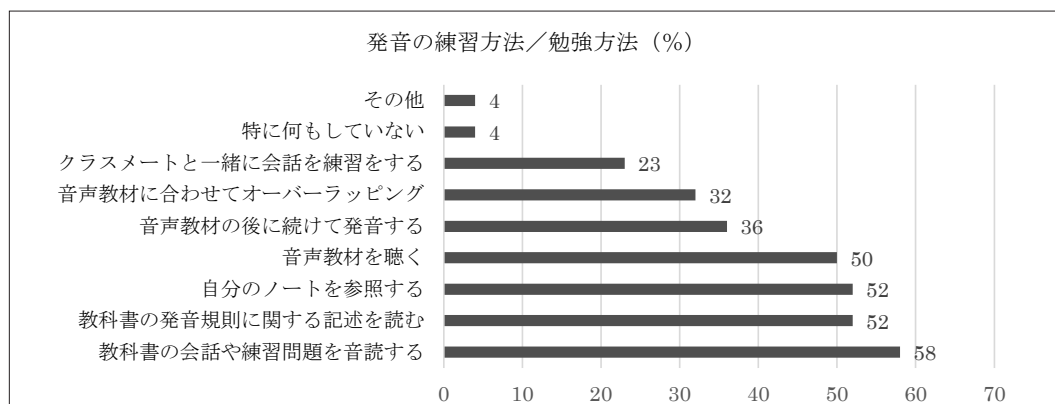


図5：普段行っている発音の練習方法（勉強方法）

ている学生は30%台にとどまっている。

「その他」と回答した学生は、「教員が発音した音声を参照する」、「書きながら発音する」、「覚えられない単語や会話をノートに書くこと」を勉強法として挙げている。

3.6 発音習得に役立つと思う授業活動

授業では、発音習得のために様々な形態の練習を行っている。それらを学生がどの程度「役立つ」と実感しているかを調べた。ここで与えた選択肢は、いずれも授業で繰り返し行っている活動であり、複数回答可として回答を得た。

図6が示すように、「教師の後に続けて発音する（82）」、「音声教材を聴く（80）」、「音声教材の後に続けて発音する（71）」、「音声教材に合わせてオーバーラッピング（65%）」といったオーソドックスな活動を多くの学生が「役立つ」と考えていることがわかる。

「教師から発音の間違いを指摘される」を8割近い学生が「役立つ」と回答しているのは、少し意外であった。というのも、筆者の授業はいずれのクラスも zoom を使ったオンライン授業であるが、教師が学生の発音の間違いを指摘するのは、ブレイクアウトルームではなく全体セッションであることのほうが多いからである。つまり学生はクラスメート全員の前で教師に間違いを指摘されるのである。そのため「教師から間違いを指摘されることを嫌がっている学生が多いのでは？」と予想したが、杞憂であった。

「グループやペアで発音を確認する（67%）」という活動は、教科書に登場する会話や練習問題の例文などをブレイクアウトルームでクラスメートと一緒に音読して発音を確認するという活動である。筆者の授業では、会話の音声教材をいきなり聞かせることはせず、まずこの活動を行い、発音がわからない単語や、自信を持って発音できない箇所を確認させてから音声教材を聴かせている。また、音声教材を聴いた後で、再びブレイクアウトルームで自分たちの発音と音声教材の発音との違いを話し合う機会を設け、発音に意識を向けるようにしている。このような活動を行うと、全体セッションで発話をする際のハードルが下がるし、発音に困って学生が黙り込むといったことを防ぐことができる。このことも、教師に発音の間違いを指摘されることを肯定的に捉え

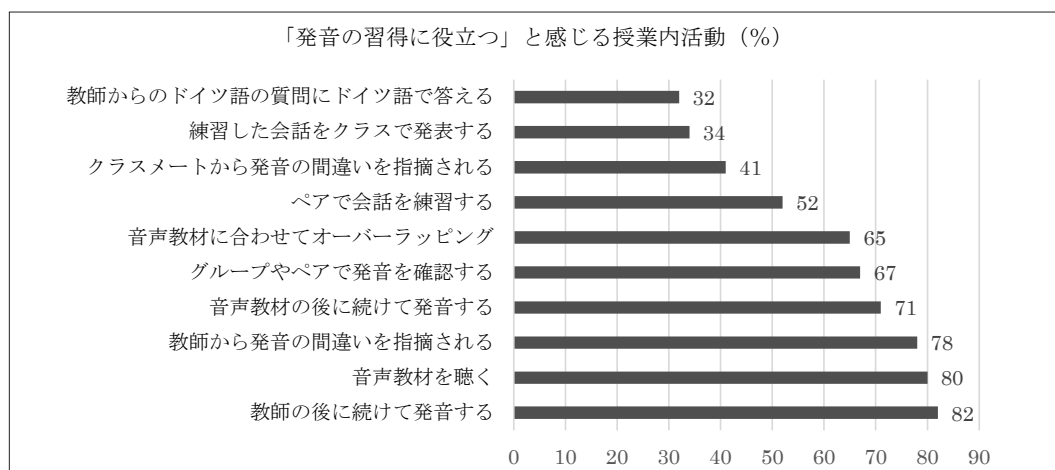


図6：発音習得に役立つと感じる授業内活動

ている一因かもしれない。

「ペアで会話を練習する」は半数程度が役立つと考えているが、「練習した会話をクラスで発表する」ことを役立つと考えている学生は3割程度に留まっている。「練習した会話をクラスで発表する」際の練習相手は、その時のブレイクアウトルームに入ったクラスメートであり、自分で選ぶことができない。また、全体セッションで発表するか否かは、ペア（あるいはグループ）の自主性に任せており、合意形成も必要である。そのため、「誰とペア（あるいはグループ）になるか」によって発表するか否か、発表がうまくいくか否かも左右されるため、その時々で取り組み方が異なるようである。全体セッションで発表をしたことのある学生は限られていることも、この活動を発音習得に役立っていると感じている学生が少なかったことに起因していると思われる。

「教師からのドイツ語の質問にドイツ語で答える（32%）」も、発音の習得にはそれほど役には立っていないと感じられているようである。「教師の質問にドイツ語で答える」場合には、教師の発するドイツ語の質問を理解し、その答えを考えなければならず、文法や語彙の意味にフォーカスが当てられることになる。そのためこの活動では、発音が二の次になっていることが推測される。

3.7 楽しいと思う授業活動

学生が「楽しい」と思う授業活動を導入することは、学習や授業参加へのモチベーションを高める上で重要である。そこで、上で問うた「役立つと思う授業活動」のうち、「楽しい」と思うものを複数回答可で回答してもらった。ただし、「教師から発音の間違いを指摘される」と「クラスメートから発音の間違いを指摘される」は、教師も学生も必要に応じて行っている行為であり、学生が積極的に関わっている活動ではないため、ここでは選択肢から除外した。

図7が示すように、「グループやペアで発音を確認する（71%）」と「ペアで会話を練習する（60%）」は「楽しい」と感じている学生が多いが、それ以外の活動について楽しいと感じる学生は一部である。クラスメートとの協働学習は、やはり学生にとって楽しい活動であることがわかる。「練習した会話をクラスで発表する（30%）」も協働学習ではあるが、楽しいと感じている割合は3割であった。筆者の授業では、教科書に登場する会話や会話形式の練習問題をまずブレイクアウトルームで練習させ、全体セッションで発表させている。その場合、教師が学生を指名するのでは

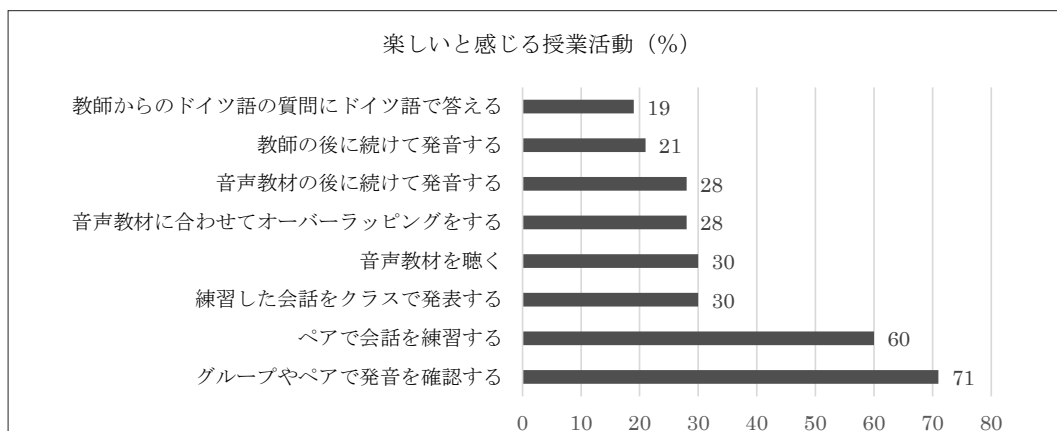


図7：授業で楽しいと感じている活動

なく、基本的に発表したいグループまたはペアを募り発表をしてもらっている。発表をしたペアやグループには「平常点にポイントをプラスする」ということにもしている。しかし、ペアやグループは zoom によってランダムに作成されるので、その時々的高手によって発表するか否かが左右されるようである³⁾。積極的でいつも手を挙げる学生もいれば、指名されない限り発表はしない学生もいる。練習した会話をクラスで発表することを楽しいと感じている3割の学生は、積極的に発表をしている学生であると考えられる。

3.8 現時点での自己評価

アンケートの最後に、自分自身の発音についての自己評価をもらい、次の選択肢からひとつを選んで回答してもらった。

1. あまり迷わず発音できる
2. ときどき迷うことはあるが、だいたい発音できる
3. どのように発音してよいのか迷うことが多い
4. どんな単語でも発音するときはいつも迷う

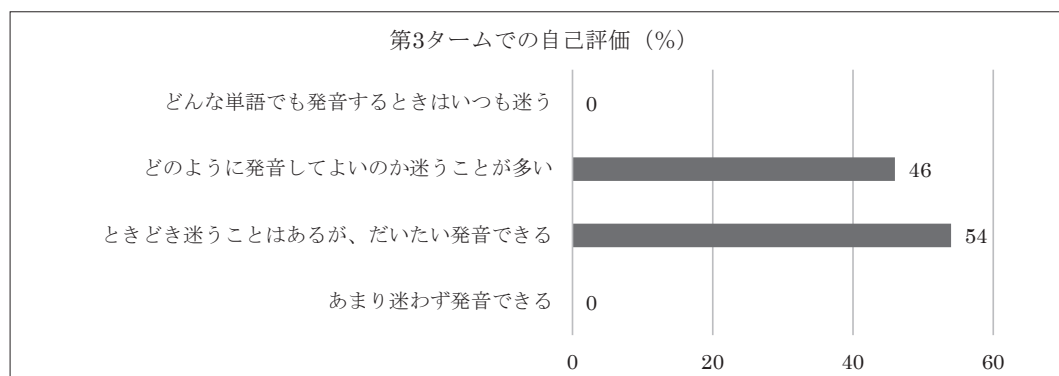


図8：自分自身の発音に関する自己評価

この問いに対する回答は「時々迷うことはあるが、だいたい発音できる」が54パーセント（25名）、「どのように発音してよいのか迷うことが多い」が46パーセント（21名）であった（図8）。「あまり迷わず発音できる」、「どんな単語でも発音するときはいつも迷う」と回答した学生はいなかった。2.4で述べたように、約7割の学生が「文字を見て発音する」ことをある程度できるようになったと感じていることから、「ときどき迷うことはあるが、だいたい発音できる」と回答した54パーセントの学生は、ドイツ語の綴りと発音の関係に慣れ、なんとか発音できる状態にあることがわかる。

4. 自己評価に基づく比較

4.1 比較する項目

3.8で見たように第3タームでの自分の発音について、半数の学生は「ときどき迷うことはあるが、だいたい発音できる」と評価し、半数の学生は「どのように発音してよいのか迷うことが多い」がそれぞれと評価している。担当教員である筆者から見れば、「あまり迷わず発音できる」

と回答してもよい学生が少なくとも全体の1割くらいは存在しているが、「どんな単語でも発音するときはいつも迷う」と回答した学生がいなかったことも、実際にそうだと感じている。したがって、この自己評価はそれなりに信頼性があると思われる。

ここでは、学生を「ときどき迷うことはあるが、だいたい発音できる」と回答した群（以下「高評価群」）と「どのように発音してよいのか迷うことが多い」と回答した群（以下「低評価群」）に分け、学習当初に感じた発音の難しさ（3.2）、第3タームで「ある程度できるようになった」と感じる項目（3.3）、普段行っている練習（勉強）方法（3.4）について比較する。

4.2 学習開始当初の発音と自己評価

図9が示すように、どちらの群においてもほとんどの学生が、「ウムラウトの発音（高評価群84%／低評価群100%）」や「単語のどこにアクセントを置くか（高評価群80%／低評価群76%）」ということを学習開始当初に難しいと感じていたことがわかる。また、いずれの群においても、半数以上が「英語と違うので違和感がある（高評価群56%／低評価群61%）」と感じていたことがわかる。

「母音の長短を判断するのが難しい（高評価群52%／低評価群42%）」は、本来「単語のどこにアクセントを置くか」とも関連しているのだが、それほど高い割合ではなかった。「どこにアクセントを置くか」ということは意識されやすいが、「母音の長短」は学習開始当初にはあまり意識されないのかもしれない。

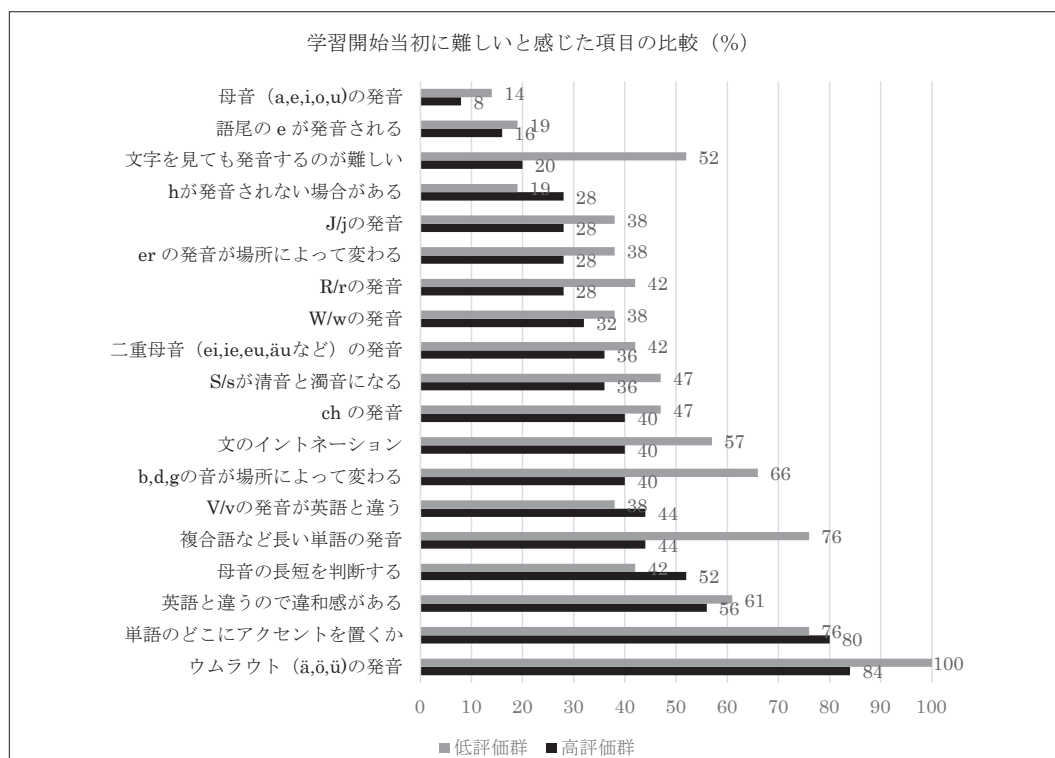


図9：学習当初に感じた難しさと自己評価

2つの比較群で値が大きく異なったのは、「複合語などの長い単語の発音」(高評価群44%／低評価群76%)、「b, d, gの音が場所によって変わる(高評価群40%／低評価群66%)」、「文字を見ても発音するのが難しい(高評価群20%／低評価群52%)」である。ここからは、第3タームにおいて発音を迷う学生は、そもそも文字を音声に変換することが苦手である可能性が高いと考えられる。長い単語の発音がなおさら難しいことは推測に難くない。

「母音の長短を判断するのが難しい(高評価群52%／低評価群42%)」と「V／vの発音が英語と違うので戸惑った(高評価群44%／低評価群38%)」では、低評価群よりも高評価群で値が若干高くなっている。しかし、その他の項目では両群での大きな差はなく、全体的には低評価群のほうが「むずかしい」と感じている学生の割合が多い。

4.3 「ある程度できるようになった」項目と自己評価

第3タームで「ある程度できるようになった」と感じる項目を2つの群で比較した。図10が示すように、「文字を見て発音する(高評価群84%／低評価群61%)」、「英語の発音との違和感がなくなった(高評価群60%／低評価群57%)」、「W／wの発音(高評価群68%／低評価群57%)」、「母音(a, e, i, e, o)の発音(高評価群52%／低評価群52%)」は、どちらの群においても半数以上が

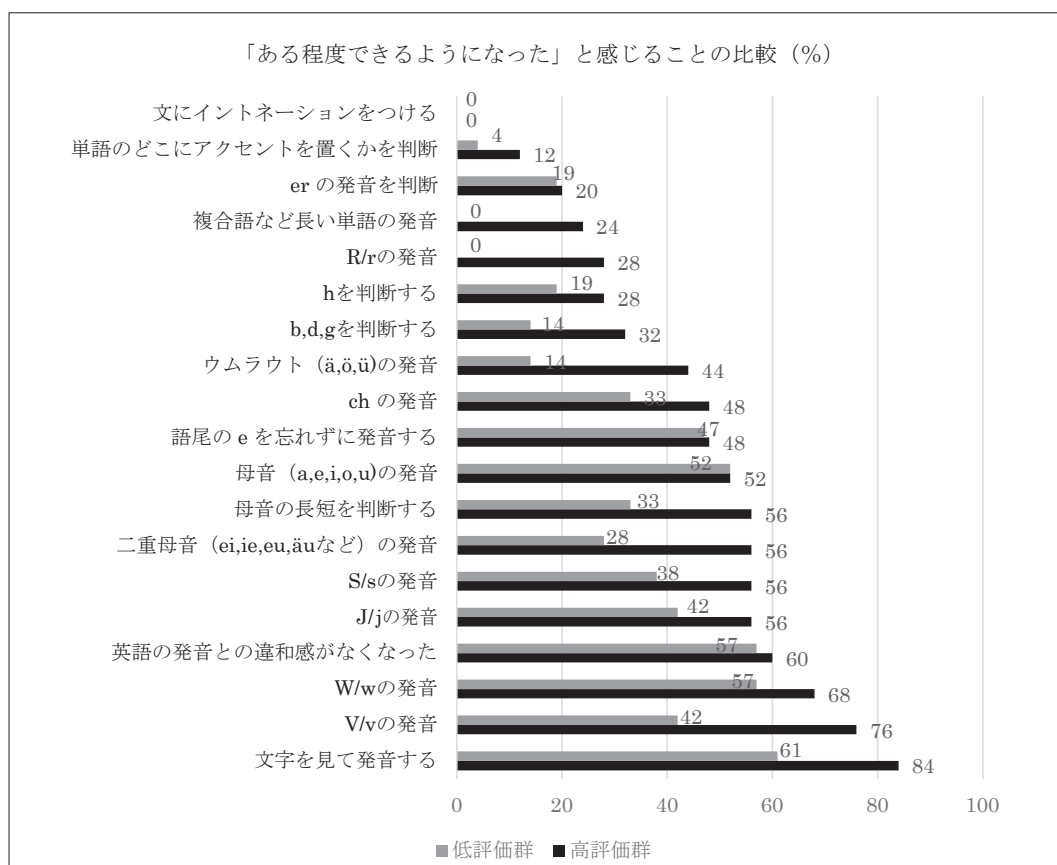


図10：第3タームで「ある程度できるようになった」と感じている項目と自己評価

ある程度できるようになったと感じている。

「語尾のeを忘れずに発音する（高評価群48%／低評価群47%）」はいずれの群においても半数近くがある程度できるようになったと感じているが、このように回答した学生は文法の知識（1人称単数の現在人称変化）も定着していると考えられる。また、疑問詞に現れる W / w の発音は、授業で疑問詞を頻繁に使うことである程度定着したと考えられる。

しかし、「文にイントネーションをつける（高評価群0%／低評価群0%）」、「単語のどこにアクセントを置くかを判断する（高評価群12%／低評価群4%）」、「er の発音を判断する（高評価群20%／低評価群19%）」、「複合語など長い発音（高評価群24%／低評価群0%）」、「R / r の発音（高評価群28%／低評価群0%）」、「h が発音されるか判断する（高評価群28%／低評価群19%）」、「b, d, g の発音を判断する（高評価群32%／低評価群14%）」、「ウムラウト (ä, ö, ü) の発音（高評価群44%／低評価群14%）」はどちらの群においてもある程度できるようになったと感じている学生は半数に満たないことがわかった。

4.4 発音の練習方法（勉強方法）と自己評価

発音の練習方法（勉強方法）と自己評価の関連を見るために、2つの群の勉強法を比較した（図11）。

「音声教材を聴く（高評価群52%／低評価群52%）」や「教科書で発音規則に関する記述を読む（高評価群44%／低評価群47%）」は高評価群と低評価群でそれほど差がなかった。

両群とも半数の学生は音声教材を聴いているが、音声教材を活用して「オーバーラッピングをする（高評価群32%／低評価群9%）」と回答した学生は高評価群のほうが多く、低評価群では1割にも満たなかった。他方、低評価群では「クラスメートと一緒に会話を練習する（高評価群24%／低評価群47%）」と「自分のノートを参照する（高評価群44%／低評価群76%）」の割合が高かった。これを評価する上で、3.6で見た「発音習得に役立つと思う授業活動」の結果についても比較した。

両群の差が最も大きかった勉強方法である「自分のノートを参照する」は、高評価群では44パーセントであるのに対して、低評価群では76パーセントである。そして図12が示すように、低評価

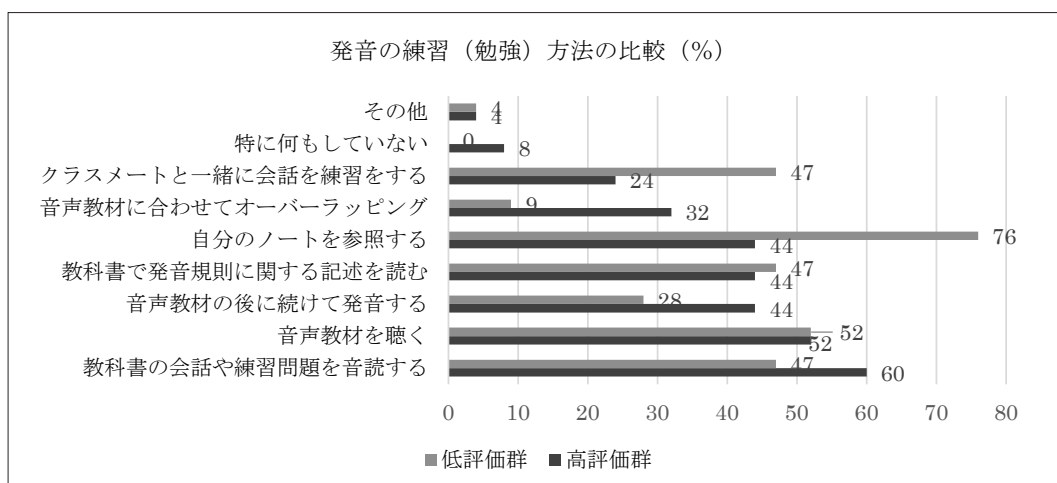


図11：発音の練習方法（勉強方法）と自己評価

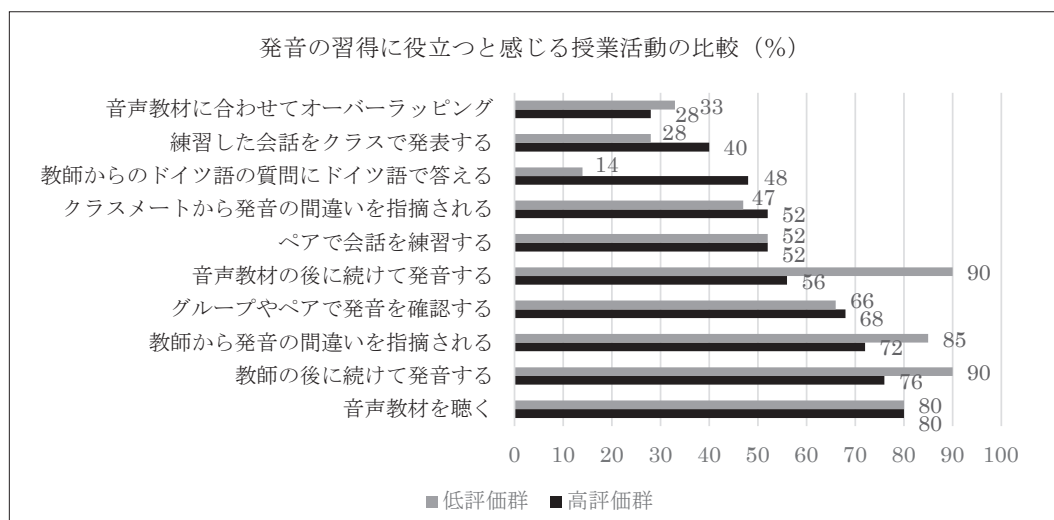


図12：発音の習得に役立つと感じる授業活動と自己評価

群では「教師の後に続けて発音する（高評価群76%／低評価群90%）」と「教師から発音の間違いを指摘される（高評価群72%／低評価群85%）」ことを役立つと感じている割合が、高評価群よりも若干高い。発音に迷うことが多い学生は授業で発音の間違いを教師から指摘されることが多く、指摘された間違いについてノートにメモを取っていることがうかがわれる。

また、「クラスメートと一緒に会話の練習をする（高評価群24%／低評価群47%）」と回答した学生の割合も低評価群では比較的高い。これらの結果からは、低評価群の学生は音声教材や教科書を使って自律した学習をするよりも、教師からの指導やクラスメートとの協働学習といった他者が介在する学習をしている（あるいは好む）と考えられる。自律学習が難しく、他者に頼ることが多いため、発音についても自信が持てないのかもしれない。

5. まとめ

今回の調査で、以下のような項目は、ある程度の学習期間を経ても難しさを感じる学生が多いことが分かった。

- ・文にイントネーションをつける
- ・複合語など長い発音
- ・単語のどこにアクセントを置くかを判断する
- ・場所によって異なる er の発音
- ・R／r の発音
- ・母音化される h
- ・b, d, g の発音（語末音の無声化）
- ・ウムラウト（ä, ö, ü）の発音

これらの項目は、授業で繰り返し取り扱い、学生の注意をそれらに向けることが必要である。同時に「どうしてそうなるのか」ということ、つまり発音規則を理解させて練習させることも必要である。また、発音の間違いがあれば容認するのではなく、適切に直すことも必要である。

半数の学生は、発音習得のために音声教材を聴いている。しかし、発音についての自己評価が比較的高い学生は、聴くだけに留まらず、さらに音声教材を利用してオーバーラッピングや Nachsprechen（後に続けて発音すること）を行っている割合が高い。他方、自己評価が低い学生はオーバーラッピングや Nachsprechen の有効性は理解しているものの、自発的には行っていないと考えられる。したがって、これらを宿題として課すなどの工夫が必要である。また、発音習得が難しい学生はペアワークやグループワークといった協働学習で発音を練習することを好む傾向にあるので、授業外で協働学習を行う機会を与えるような、プロジェクト型の発音練習課題も有効であろう。

今回の調査で選択肢として挙げた発音項目は限定的であるし、本稿ではその調査結果を考察するに留まったが、これを基に発音習得のために効果的な練習問題や教材を開発し実証したいと考えている。

付記

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「複言語・多言語教育を視野に入れた初・中級学習者用8言語例文パラレルコーパスの開発」（20H01285, 研究代表者：岩崎克己）の研究成果の一部である。

注

- 1) 筆者と母語話者教員がチーム・ティーチングをしているクラスで授業への要望を尋ねた際に、母語話者教員の授業について「もう少し発音に対して厳しくてもいいと思う」という意見があった。
- 2) 広島大学では学習プラットフォームとして Bb9 を2022年度まで使用。2023年度からは moodle を使用する。
- 3) 学生がブレイクアウトルームで練習をしている間、筆者は進捗状況を確認するためルームを巡回しているが、「発表して間違っていたら注意されるから発表したくない」と学生が話している場面に遭遇したことがある。

参考文献

- 岩崎克己 (2017). 「日本人初級ドイツ語学習者の語彙調査（基本動詞100語）の結果分析」. 『広島外国語教育研究』 20. 285-306. 広島大学外国語教育研究センター.
- 島根国士 (2015). 『英語習得の思想と方法』. 彩流社.
- 中川純子・服部真子 (2022). 「学習者の将来につながる発音教育のあり方とは」. 『ドイツ語教育』 26. 44-64. 日本独文学会ドイツ語教育部会.
- 正木晶子 (2013). 「日本におけるドイツ語音声教育の実態調査の結果」. 『ドイツ語音声教育の現状と可能性』. 2-13. 日本独文学会研究叢書 090.
- Dieling, H. (1992). *Phonetik im Fremdsprachenunterricht Deutsch*. Langenscheidt. Berlin.

ABSTRACT

A Study on Pronunciation Acquisition of Beginners in German: Based on a Questionnaire Survey

Takako YOSHIMITSU

Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

In foreign language classes, it is essential to teach learners the rules of pronunciation and to master the relationship between pronunciation and spelling. However, the current situation is that very little emphasis is placed on pronunciation in German language education in Japan. Textbooks tend to ignore pronunciation. I know from experience that students who learn German well can pronounce words correctly, and students who cannot pronounce words well have also difficulty mastering vocabulary and grammar. This paper reports what students find difficult when learning German pronunciation and how they study based on a questionnaire survey.

From the results of the questionnaire, it was found that some of the pronunciations that are characteristic of German continue to be difficult for learners to learn. About half of the students listen to audio materials when studying pronunciation. Students who feel that they have mastered pronunciation to some extent use audio materials to practice pronunciation. Students who are not good at pronunciation only listen to audio materials and do not practice much beyond that. However, they are positive about teachers correcting their pronunciation. They may find it difficult to learn independently and need support from teachers and classmates.